

白山とあさまの話

大勢の人がわつと沸く会場の隅で、その光景をぼんやりと眺めていた。

それは、あの日——北陸新幹線の列車名が決まった日の光景だった。拍手を浴びているのは自分ではない。自分はずつと、選ばれなかった者として隅の方に立っている。

そのうち、誰かに右手を掴まれた。はつと振り返ると見知らぬ顔の男が自分の手を掴んでいる。誰だ、離してくれ、と振り払おうとするが、男の手は離れるどころかより一層強い力が加わり、骨が軋むような嫌な音がした。

その間、誰もこちらには目もくれない。自分と男以外全員が正面の壇上を見て、大きな拍手を送っている。

彼らの背中が暗に訴えている。

自分の手を握る見知らぬ男が、口を開いた。嫌だ、聞きたくない、と耳をふさごうにも、手は自由にならず、耳は塞げない。

男の声が、耳に飛び込んできた。それは一人の声ではなく、大勢の人の声が重なったような、耳障りな音となつて、言葉を紡ぐ。

『選ばれなかった者には、もう用は無い』と。

嫌だ！

突然、目の前が真っ暗になった。男も誰も、周りすら見えなくなる。どこかへ落ちていくような感覚に、身体を強ばらせ、ぎゅつと目を閉じた。

「はつ……！」

目を開けると、どこかの部屋にいた。慌てて身体を起こして辺りを見ると、見慣れた寝室だと気付く。

夢を見ていたのだ。

いつも同じ場面で目が覚める。起こした身体を伝つて、冷たい汗が背中を滑り落ちていく。動悸が激しく、呼吸が上手く出来ない。自分の浅い呼吸音がやたらと耳に障る。

白山は、大きく息を吐き出した。何度か深呼吸を繰り返したところで、ようやく落ち着きを取り戻す。と同時に、ぴりりと右腕に痛みを覚えた。

痛みを作り出していたのは、自分の左手だ。思い切り力を入れていたせいで強ばってしまった左手の指を、一本ずつゆつくりと外していく。全て外れた後で掴んでいた部分を見ると、薄暗い部屋の中でもはつきり分かるほ

ど、くつきりと手の跡が付いていた。

もう何度目だろう、同じ夢を見るのは。あの日からもうすぐ一月が経とうとしているのに、未だにあの日の光景にうなされる。細かい所は違えど、最後に言われる台詞は同じ。どうせならばもつと前に目が覚めてくれれば良いのに、と思わずにいられない。

まだ夜明けにはほど遠い時間で、カーテンの隙間から差し込んでいるのは月明かりだ。そのお陰で何とかものの判別がつく程度の明るさの部屋で、白山は隣の布団で眠るはくたか——新幹線に選ばれたはくたかではなく、その先代にあたる元特急——の様子を伺った。

はくたかはこちらに背を向けていて、表情は分からないう。だが、規則的に聞こえる呼吸が、深く眠っている事を示していた。自分の寝言やうめき声で起こしていたらと心配したが、今日は大丈夫だったようだ。

白山も再び布団に潜り込んだ。十一月も半ばになり、山間にあるこの辺りは夜になるとぐつと気温が下がるようになつてきた。風邪を引かないようにと、肩までしっかり布団を掛けて目を閉じた。少しだけ、また同じ夢を見たら、という恐怖はあつたが、睡眠が足りていなかった身体は、夢を見ることがせず、深い眠りに落ちてくれた。



夜が明けきつてから目を覚ました白山は、いつもより少し丁寧に身なりを整えた。

今日は来客の予定がある日だ。相手から訪問の打診があつた時、こちらから伺います、と申し出たのだが、何かと理由をつけて断られ、結果としてこの家に招くことになつた。

来客が決まつた事をはくたかに告げると、失礼がないようにと、予定の一週間前から家中を掃除し始めた。そこまでしなくても良いですよと白山が言つても全く聞き入れてくれず、明らかに客が入らないであろう台所や二階の寝室など、とにかくあらゆる場所を掃除していった。

途中から白山も手伝い、年末の大掃除並に二人で家中を徹底的に掃除した事で、家の中はとて綺麗になっている。この状態であれば、誰を招いても問題ないだろう。たまにはこれくらい盛大に掃除をしてみるものだと思うながら、白山は一階の居間に座つてその客が来るのを待つ。

「白山、お茶とコーヒー、どちらがいいかな？」

台所から顔を覗かせたはくたかが、そう尋ねた。白山

は少し考えて、以前、今日の訪問者——今日ここへ来るのは、現在の長野新幹線の列車であり、白山の特急時代の先輩でもあった、あさまだ——と喫茶店で話をした時の事を思い返した。確かあの時は、コーヒーを飲んでいたら記憶がある。

「コーヒーがいいと思います」

「わかった。到着して暫くしたら持つて行くからね」

はくたかはどことなく緊張しているようだ。そもそもこの家に來客があること自体珍しいのだから仕方ない。白山にしてみれば、新幹線に選ばれなかった自分に、一体何の話があつての訪問かと思議に思う。

程なくして、チャイムが鳴った。はい、と返事をして、白山が玄関へ向かう。磨りガラスの向こうには、黒い人影が一つ。がらがらと引き戸を開けると、そこには約束通り、あさまが立っていた。

「おはようございます」

「おはようございます、あさまさん。遠くて大変だったでしょう。こんなところまで来て頂いて、すみません」

「いえ、こちらこそ無理を言つてごめんなさい」

あさまは頭を下げると、手にした紙袋を白山に差し出した。

「今日は仕事としてではなく、あくまで私用としてここに来ました。これは少しですが、お土産です。よければ

はくたかさんと食べて下さい」

お氣遣いありがとうございます、と受け取つた紙袋を手提げ、どうぞと室内へと促す。あさまが玄関の中へ入ると、はくたかが台所から顔を覗かせるのがほぼ同時だった。

あさまはすぐにはくたかに氣付き、再会に顔をほころばせる。

「はくたかさん。ご無沙汰しています。お元氣そうで何よりです」

靴を脱ぎかけていた手を止めて、あさまははくたかに向かつて頭を下げた。彼は立場の上下に関係なく、誰に対してもこのような丁寧すぎる態度を取る。はくたかも合わせて頭を下げる。そして、白山が色々とお世話になつたようで、と言うと、あさまは大きく頭を横に振つた。

「そんな、むしろ何も出来なかつた事を申し訳なく思っているのです。私が声を掛けたことで、白山にも、あなたにも、悪い事をしたと……」

「あさまさん、玄関じや寒いですから、どうぞ中へ」

「そうですね、どうぞどうぞ」

二人に促され、ようやくあさまは玄関から家の中へと上がった。白山は普段居間として使っている部屋へあさまを案内し、はくたかは台所へと戻つていく。

「狭いところですが、どうぞ」

座布団を勧め、白山はあさまの向かい側に座る。あさまは座布団に座り、脱いだコートを脇に置くと、興味深げに辺りを見回していたが、ふう、と小さく息を吐き出し、白山の顔を見た。

「白山、まずは新幹線候補としての研修、お疲れ様でした。そして、新幹線に選ばれなかった事、何と言っているか……私としても、大変残念でした……」

「あさまさん……」

「私から誘っておきながら、このような結果になってしまい、申し訳ありませんでした。あの日の後、こちらもプレス対応などでばたばたしてしまい、直接お詫びをしなかったのに、こんなに遅くなってしまった事も、本当にごめんなさい」

額を座卓の天板にこすりつけそうな程深く項垂れたあさまに、そんなに謝らないでください、と白山は言う。

「頭を上げて下さい、あさまさん。あの結果は、そりゃ僕にとつてもすぐく残念でしたが、こうなつたのはあさまさんの所為じゃないです」

「君にそう言つて貰えると、少しですが、胸が軽くなります……」

「それに、あの公募の結果を見れば、仕方がないと思っしかありませんよ。一位と二位でも二千票近い差があつたんですから、僕ではなく、今のはくたかが選ばれるの

は必然でしょう」

白山の言葉に、あさまは首を横に振る。

「ですが、得票数が一位となつても、選ばれない事はあります。現に、東北新幹線のはやぶさは、公募の得票数が一位ではなかった」

「ではどうして、僕は選ばれなかったのだと思いますか」

どうして、何故、自分は選ばれなかったのか。この一月ほどの間に何度自問したことだろう。白山は、まだ納得のいく答えを見つけられずにいた。だから、あさまが来ると決まつた時から、訊いてみたかつた。

あさまは頭を下げたまま、すみませんと言つた。

「ひとえに、私の力不足です……そう思つて下さい。君は他の候補者にも、今回選ばれた者たちにも、劣るところは何処にも無かつたのですから。だから、恨むなら私を」

「恨むだなんて、そんなこと」

頭を上げたあさまは、頭を振つた。

「もし君が、新幹線の列車に選ばれなかつた事で、深く傷ついて、苦しんでいるのだとしたら、私を恨んで下さい。そうする事で、その苦しみが少しでも楽になるのなら、いくらでも憎まれ役になりましょう」

特に、君は一人で色々と抱え込んでしまう質だから気になつている、というあさまの言葉に、白山の心臓が跳

ねた。そして、今朝方見た悪夢を思い出す。右腕に残っていた跡はもう消えて見えなくなっていたが、夢の中で腕に食い込んでいた手が脳裏に蘇る。夢では、あの手は見知らぬ誰かの手だった。

返答に困っている様子から、白山が苦しんでいる事を察したのだろう。あさまは、やはり君も、と何かを言いかけた。

その時、失礼します、と声が掛かり、あさまはハッとしたように口を噤んだ。

はくたかが台所から二組のコーヒーカーップを運んできた。淹れたばかりのコーヒーからは、甘い豆の香りが漂っている。こここのところ白山が好んで飲んでいる種類のものだ。

あさまの前と白山の前にそれぞれカップが置かれる。

「ありがとうございます」

「どうぞ、ごゆっくり」

そう言っただけかか部屋を出て行った。すぐに廊下にある階段を上っていく音がしたので、二人の話が聞こえないように席を外してくれたのだろう。その心遣いに感謝しながら、白山は目の前に置かれたコーヒーを一口、口に含んだ。

中断されてしまった話を蒸し返す気にはならなかったので、白山はあさまに尋ねた。

「……自分を恨めというのなら、あさまさんが自分の力不足だったと思う理由を教えてください。僕から見れば、あさまさんには何の落ち度も無かったと思うのですが」

あさまは頷くと、どこからお話しすれば良いのか、としばし考えるそぶりを見せた後で、ゆつくりと話を始めた。

「今回、北陸新幹線として、金沢・東京間の全区間を走る速達タイプ、各停タイプと、金沢・富山間のシャトルタイプ、そして今私が担当している東京・長野間の現・長野新幹線タイプの四種類の運行形態となることが事前に決まっていました」

「そうでしたね。シャトルタイプの話が出たときは正直驚きました」

「あれは現在富山まで乗り入れている特急を全て金沢止まりにする代わりの列車として、西日本からの提案で決まりました。東京方と違って、金沢方はまだダイヤに余裕がありますから」

あさまもコーヒーに手を付けた。あさまがコーヒーを飲むことは知っていたが、口に合うか不安だった白山は、美味しいという一言にほっと胸をなで下ろす。

コーヒーで喉を潤したあさまが話を続けた。

「四種類の運行形態が決まり、東日本と西日本がそれぞれ二枠ずつ名前を決める事になりました。私があるまま